

「Gの政治考」 臥雲義尚ブログ



2017.02.13 vol.33 「ポピュリズムとは何か、地方からの視点」



ポピュリズムという言葉はどう捉えればいいのか。先日、小さな宗教の節分祭に集まったお年寄りや家族連れの姿を見ながら、頭を過ぎりました。東京で政治記者をやっていたときと、地方都市で政治家を目指している現在では、微妙に受け止め方が変わっていると感じています。

普段、報道や政治の場で使われるポピュリズムという言葉は、否定的なニュアンスが前提となっています。大まかに言えば、民主主義はいいもの、ポピュリズムはよくないもの、と分けられてきました。しかし、イギリスのEU離脱やアメリカのトランプ大統領誕生という世界史的なエポックが、ポピュリズムと関連付けて分析・論評され、日本もこうした動きと無縁ではない状況であることを考えれば、そもそもポピュリズムとは何なのか、今こそ突き詰めておく必要があると思います。



政治学者の水島治郎氏は、著書『ポピュリズムとは何か』で、①固定的な支持基盤を超えて幅広く国民に直接訴える「政治スタイル」②人民(=民衆)の立場から既成政治やエリートを批判する「政治運動」という2種類の定義があると指摘しています。①がリーダーの目線から見たポピュリズム、②が民衆の目線から見たポピュリズム、と言い換えられるかもしれません。現代の日本で政治を考える際に使われてきたのは、主に前者の意味でした。小泉さんや橋下さんの政治手法に対する論評が、その典型です。一方で、イギリスをEU離脱へ導き、アメリカでトランプ大統領を生み出したのは、後者の伝統的な右派にも左派にも分類できない「下」からのポピュリズムでした。



(jp.wsj.com)

こうしたポピュリズムの原動力となったのは、イギリスでは「置き去りにされた人々」、アメリカでは「忘れ去られた人々」と呼ばれた、グローバル経済によって衰退した地域で疎外感を味わう普通の人たちです。そして、ヨーロッパでは、民族主義や権威主義をベースとした極右のポピュリズム政党と一線を画し、エリート支配への批判や民衆の政治参加を前面に掲げる「リベラル型」のポピュリズム政党が、有権者の支持を広げているとされています。日本でも、経済格差の拡大や東京への一極集中が加速していく中で、「下」からのポピュリズムが胎動してきています。



松本に戻ってから、様々な境遇の人たちと出会い、これまで見えていなかった生活の現実を垣間見ることができる機会が増えました。欧米に見られる反イスラム&自国民主義と同列に論じられないものの、日々の生活や雇用、教育や介護の不安から生まれる、既成政党やエリートへの不満というポピュリズムの土壌は、地方都市で静かに広がりとつとあると感じます。それが、多様な民衆の暮らしに目を向けさせ、停滞した政治を改革することにつながるのであれば、必ずしも否定的に捉える必要はないでしょう。「ポピュリズムは、デモクラシー(=民主主義)の後を影のようについてくる」(マーガレット・カノヴァン)という言葉があります。ライバル不在の安倍1強体制と都民から喝采を浴びる小池劇場を横目に、ポピュリズムの功罪を見極めていきたいと思っています。

<編集後記>

1年前の喧騒が懐かしく思い出されます。広場に面した選挙事務所は最近、セブンイレブンになりました。この1年、駅前事務所で昼の住民として松本駅前周辺を見てきました。松本駅前お城口に、コンビニが4店舗も並びました。一方で、お世話になった老舗中華料理店が90年の歴史に幕を閉じ、39年間営業した大型店は秋に閉店する予定です。歯痒さと寂しさを感じます。(くり)

臥雲の会 事務局

〒390-0811
長野県松本市中央1-2-24 やまがビル2階
TEL : 0263-36-7343
FAX : 0263-50-6727
E-mail : info@gaun-y.com

<臥雲義尚を応援して下さる皆さまへ>

臥雲義尚の政治活動は、みなさまの支援によって支えられています。継続的なご寄付が活動の支えになります。引き続きご支援をお願い致します。

G 通信

が うんよしなお
臥雲義尚 リポート

2017年3月・第3号

<巻頭言>

月曜日の朝、田園都市線で渋谷駅に着くと、ふっと目に入ってきたものがありました。「4時も！シブ5時」。

ジョン・カビラさんが大きく映し出された、NHKの新番組のデジタルポスターでした。胸の奥の方が、少しザワつきました。

郷愁のような、羨望のような、昂りのような、複雑な感情が一瞬よぎりました。

すぐに通勤の雑踏にまぎれ、「バスタ新宿」から松本行き的高速バスに乗り込みました。新しい年度と共に、様々な変化が始まろうとしています。

静かな日常が続く松本市でも、2017年度は大きな変化が胎動する1年です。

松本駅から東へ徒歩20分余りの広大な敷地に建設が進む「イオンモール松本」。

その巨大な輪郭は、松本の街全体に与えるインパクトの大きさを否応なく想起させます。道路と施設のミスマッチが引き起こす深刻な交通渋滞の懸念が日増しに高まっています。市役所も議会もメディアも、なぜか音無しの構えですが、現実は目の前に迫っています。

建設から60年近く経った市庁舎の建て替え問題が、もう1つの変化の胎動です。

松本市は、新年度中に基本構想を決定するという政治スケジュールを公表しました。

建設場所について、菅谷市長は、現地建て替えを軸に検討する考えを示しています。

「市民の意見を聞いても、まとまらないと思う」。地元紙に掲載された市長の言葉です。数十年先を見据えた、幅広い世代による、百家争鳴の議論が求められる問題と考えます。

人口減少時代を生きる、松本のいまと未来。

医療や介護の安心、子育てや教育の基盤を、より確かなものにしていくことが必要です。その上で、そのためにも、賑わいや利便性という都市のパワーを高める必要があります。イオンモールによる交通問題を引き金に、官民一体で新時代の交通政策を練り直すこと。そして、観光立市や広域連携の観点も踏まえ、新市役所を街づくりに最大限生かすこと。

「松本リファイン」。

市長選挙から1年が経ち、新たな決意と覚悟を持って日々の活動に取り組んでいきます。

松本をリファインしよう



“臥雲の日常と横顔”

1月～3月の主な投稿記事

1月

- 1.7 母校野球部 好天の初練習
- 1.8 「あめ市」の歴史深掘りを

真田より、松本あめ市の時代行列に友情出演?



- 1.16 山梨県立大学で最終講義
- 1.20 むつみ高校の入学説明会

2月

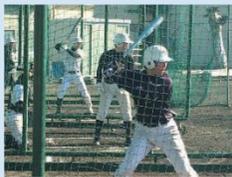
- 2.1 市町村人口のデータ公表
- 2.18 中山英子さん引退慰労会
- 2.19 乗鞍・白骨の魅力を探る
- 2.20 地元紙のニュースに疑問
- 2.22 イオン渋滞問題に言及なし
- 2.22 五輪の自転車合宿誘致へ
- 2.26 松本ブルワリーが1周年

老朽化した市役所庁舎の建て替え問題が、今年に入って急浮上。臥雲は、「市民を挙げて透明でオープンな議論にしよう」と動き始めました。過日は、新潟長岡市に取材に赴きました。ジセダイトークのテーマでも取り上げます。その様子は次号にて。

3月

- 3.3 イオン影響に懸念も議会は
- 3.8 駅前複合市役所で長岡視察
- 3.9 「こいこい松本」実行委参加
- 3.10 高校生の自転車請願が採択
- 3.12 球春到来 母校に人工芝
- 3.22 イオン渋滞対策で市が説明

連日の好天に恵まれ、母校の野球部が今年の初練習。食トレの成果で、体重70キロ超の選手が多いことに驚いた。来週は3学期の中間テストがあるそうだが、勉強も野球も集中して効率良くやって、実力を高めてほしい。



戦国時代、塩の供給を断たれた武田信玄に、上杉謙信が地元産の塩を送り、その塩が経由地の松本に到着した日を記念して始まったとされる「松本あめ市」。きのうと打って変わった氷点下の寒さにもかかわらず、中心市街地は大勢の人たちで賑わいました。昭和天皇が崩御した年を除き、400年近く続けられてきた、松本の冬の風物詩。交通と商業の要衝だった松本の歴史を深掘りし、それぞれの商店街の取り組みを連動できれば、さらに魅力あるイベントとなる可能性を感じました。



それにしても、このニュースが、どうしてベタ記事の扱いなんだろう。見落としてしまっていた。市民タイムスは、掲載もされていない。環境省のホームページによると、①阿寒②十和田八幡平③日光④伊勢志摩⑤大山隠岐⑥阿蘇くじゅう⑦霧島錦江湾⑧慶良間諸島の8カ所の国立公園について、2020年までに訪日外国人を惹きつける取り組みを先行的かつ集中的に実施するという。「2017年度以降の指定を目指す」としているけど…。

国の国立公園補助松本市 要望出す 副市長 大塚 松本市の山岳地域の保全観光について話し合う行政機関連絡協議の代表者会議が1日、市内で開かれた。席上、外国人観光客を自国最大の国立公園として誘致する

新年度予算案を審議する松本市議会が、きょう開会。菅谷市長が所信を表明したが、市民生活に大きな影響が予想されている「イオンモール松本」開業とそれに伴う交通渋滞問題について、全く言及がなかった。問題そのものが存在しないかのような不可思議な気分にとわられた。提案された当初予算案でも、渋滞対策の関連経費は「0」。市民タイムスの瀬川記者の取材によると、市長・副市長による査定で調整不足などを理由に計上が見送られたという。開業を半年後に控え、他人事では見送られない。市議会の質疑で、行政の責任感を喚び覚ましてもらいたい。



長岡市役所を視察してきました。ペDESTリアンデッキでJR長岡駅と直結した駅前立地、スタイリッシュなガラス張りの市庁舎、多目的の広場やバスケットのアリーナを併設した複合施設化。衰退する中心市街地の再開発の拠点とすることを目指し、総事業費130億円をかけて5年前に開館しました。松本市は、市役所建て替えの基本計画を新年度中に決定したいとしています。同じ人口25万都市として参考になることも教訓にしなければならないことも多々あると思いました。これから本格化するだろう市民レベルの議論に生かしていくつもりです。



ジセダイと語る 松本のプライド

M 松本
P プライド
P プロジェクト



次代を担う若者と、松本のこれからについて語り合う、MPP(Matsumoto Pride Project)のジセダイトーク。

今回、ご紹介するのは、臥雲が松本の街づくりの柱として位置づける、「スポーツ振興」と「山岳リゾート」です。2つの事例に共通しているのは、ある1つの思いに共感する人たちが集まり、チームとして変革に挑んでいく姿です。松本山雅FCも、最初は少人数の思いによって支えられていたものが、やがて大きなうねりとなって、今に至りました。新たな活動を始める若い世代に光を当てることは、松本を見つめ直し、これからの政策を練り上げる作業でもあると感じています。今後も、福祉や子育て、環境・エネルギー、多文化共生など、様々なテーマを取り上げ、ジセダイの視点を政策づくりに生かしたいと考えています。

1.30 「スポーツで豊かな街をつくる」～松本山雅の求心力～ ゲスト: 豊岡 圭氏 + 窪田 浩明氏

臥雲の facebook コメントより



第6回は、松本山雅の関係者をお招きしました。チーム発足からボランティアとして山雅を支えてきた豊岡さんは、その発展は、「ボランティア文化が根づいた松本の地域性」によるところが大きいと言います。事業化に尽力した窪田さんは、親会社がプロチームを抱えることが多い中、1口5万円の株主で構成された市民の企業体で運営されていることが「山雅らしさ」と話す。ボランティアとして、株主として、サポーターとして、多くの市民が関わる仕組みが、「One soul」の言葉と共に、大勢の老若男女の心を1つにしてくれたのだと納得しました。



シニアサポーターが「山雅は生きがい」と語るように、人と人をつないで、元気を与えるスポーツは、地方都市を活性する有効な手立てであると、再認識しました。

てくてくさんの特製ケーキ



昨夜のジセダイトークは、地域リーグ時代からクラブの運営を支えてきた、TEAM VAMOS 代表の豊岡圭さんとアドソニック松本支社長の窪田浩明さんの貴重な経験談を聞くことで、「松本山雅の求心力」の核心に迫ることができたのではないかと思います。そして、関係した人たちが偶然を必然に変えて築き上げてきた松本山雅のブランド力を、松本市民の公共財として松本のあらゆるスポーツと次代の街づくりに生かしていく。そんな希望を感じた夜でした。元オリンピック選手が2人参加してくれた、贅沢な夜でもありました。

2.24 「ソトの視点で山岳郷を復活させる」～乗鞍のファシリテーター～ ゲスト: セツ・マカリストー氏



第7回は、乗鞍在住 11年のセツ・マカリストーさんをお招きし、山村集落の活性化のプロセスから、プロジェクトチームのあり方まで考えました。

乗鞍のポテンシャルは、「ホンモノの山」だというセツさん。「アルプスの中で暮らす」ことを売りに、同じ目的を持った仲間と、チームでアイデアを実現させ、乗鞍を復活させようとしています。「そこにしかないもの」を見つけ、「出る杭になろう」と呼びかけます。目的達成のために、「なぜ」「どうして」の問いかけを繰り返す。サーバントリーダーとして、チームが求めているものを準備していく。そんなファシリテーターの存在が重要であることを感じました。



また、「案内看板が全て英語表記になるのはおかしい」という言葉に、インバウンド観光の本来の意味を考えさせられました。



第7回のジセダイトーク。アメリカから移住して家族7人で乗鞍に暮らす、セツ・マカリストーさんの「ソトからの視点」に傾かされるが多く、乗鞍を山岳郷として復活させ、松本全体の活気につなげるためのアイデアを考えていく上で、僕自身、非常に勉強になりました。何よりもセツさんの言葉に人を惹きつける力があり、集まった人たちの間に世代や立場を超えて共感が広がっていったことが、印象的でした。be here. 自分はなぜここにいるのか。突き詰めて考え直してみようと思います。そして、松本を世界基準の山岳リゾートにするために、いずれまたセツさんとコラボできる機会が来ることを楽しみにしています。